四季の漢詩　秋の部

1　静夜思

静夜思　　李白

牀前看月光
疑是地上霜
舉頭望山月
低頭思故郷

牀前月光を看る
疑うらくは是れ地上の霜かと
頭を挙げて山月を望み
頭を低て故郷を思う

【通釈】

起句　寝台の前まで射しこんでいる月の光、
承句　ふとこれは地上におりた霜ではないかと疑う程白く輝いている。
転句　この静かな秋の夜、頭をあげては山の端にかかる月をながめやり、
結句　頭をたれては、故郷に思いをはせるのだ。

【語釈】

◉静夜思…静かな（秋の）夜の思い。◉牀前…寝台のまえ。
◉疑是…・・・ではないかしらと思われるほどである。
◉望…遠くをながめやる。◉低頭…頭をたれる。

【押韻】下平声 七陽韻　　光、霜、郷。
五言絶句は普通承句と結句に押韻するが、この詩では起句も押韻している。又、承句と転句では平仄の規則を外している。

【解説】

盛唐第一の詩人李白の代表作のうち、最も人口に膾炙した名作の一つです。
秋の夜の、寝台にさしこんだ月光の下で、頭をたれて故郷を思う情景を、よどみなく美しく歌い上げた手法、特に転・結句の対句は見事です。
李白（七〇―七六二）は西域の生れとされているが、幼くして蜀（四川省）に移り住み、若い時から詩書百家の学に通じたとされる。二十五歳の時、三峡を下って蜀を出、諸国を歴遊、多くの詩人と交わり多くの名詩を残した。特に絶句にすぐれ、李絶杜律（李白は絶句、杜甫は律詩にすぐれるの意）と、杜甫と並び称せられる。この詩は、作者が故郷を出て、洞庭湖の北安陸地方に滞在していた三十一歳頃の作とされています。

付一　秋浦歌　秋浦の歌　李白

白髪三千丈
緣愁似箇長
不知明鏡裏
何處得秋霜

白髪三千丈
愁に縁りて箇の似く長し
知らず明鏡の裏
何れの処にか秋霜を得たる

付二　峨眉山月歌　峨眉山月の歌　李白

峨眉山月半輪秋
影入平羌江水流
夜發清溪向三峽
思君不見下渝州

峨眉山月半輪の秋
影は平羌江水に入って流る
夜清溪を発して三峽に向う
君を思えども見えず渝州に下る

付三　子夜呉歌　子夜呉歌　李白

長安一片月
萬戸擣衣聲
秋風吹不盡
總是玉關情
何日平胡虜
良人罷遠征

長安一片の月
万戸衣を擣つの声
秋風吹いて尽きず
総べて是れ玉関の情
何れの日にか胡虜を平らげて
良人遠征を罷めん

付四　八月十五日夜禁中獨直對月憶元九　八月十五日の夜禁中に独り直し月に対して元九を憶う　白居易

銀臺金闕夕沈沈
獨宿相思在翰林
三五夜中新月色
二千里外故人心
渚宮東面煙波冷
浴殿西頭鐘漏深
猶恐清光不同見
江陵卑濕足秋陰

銀台金闕夕沈沈
独り宿し相思いて翰林に在り
三五夜中新月の色
二千里外故人の心
渚宮の東面煙波冷やかに
浴殿の西頭鐘漏深し
猶お恐る清光同じく見ざるを
江陵は卑湿にして秋陰足し

2 客中作

客中の作　　李白

蘭陵美酒鬱金香　　蘭陵の美酒鬱金香
玉椀盛來琥珀光　　玉椀盛り来る琥珀の光
但使主人能醉客　　但だ主人をして能く客を酔わしむれば
不知何處是他鄉　　知らず何れの処か是れ他郷

【通釈】

起句　香ぐわしい地名の蘭陵で醸される美酒は鬱金香のかおりを放つ、その名も鬱金香。

承句　美しい杯になみなみと注げば、琥珀色に光りかがやく。

転句　この家のあるじが、この酒で旅人の私を十分に酔わせてくれさえすれば（酔わせてくれるので）、

結句　いったいどこが他国なのであろうか。故郷にいるのと少しも変らない。

【語釈】◉客中…旅の途中、旅行中。◉蘭陵…地名。今の山東省。嶧県の東。酒の産地。◉鬱金香…香草の名。一説にサフランの漢名とも。又、この香草の香りを加えて醸した酒の名。◉玉椀…美しい杯。◉琥珀…植物の樹脂が地中に埋れて化石化したもの。半透明で黄や褐色の美しい色彩を帯びる。◉主人…あるじ。◉客…旅人。ここでは李白自身をいう。◉但…ただ・・・しさえすれば。◉他郷…よその土地。故郷以外の土地。

【押韻】下平声 七陽韻　　香、光、郷。

【解説】

李白（七〇一―七六二）は盛唐の人。杜甫と並んで中国を代表する大詩人。酒を好み詩仙と称せられた。詩風は豪放。開元二十四年（七三六）三十六歳の時、李白は山東に行きその地に寓居し、孔巣父、裴政、張叔明、韓準・陶沔らと徂徠山で会合し、酒をほしいままに飲み、「竹渓の六逸」と号し、隠逸の生活を送った。この詩はその頃の作とされる。詩の構成は、先ず起句に蘭陵という香り高い地名(蘭は香草)と鬱金香(香草)を配し、承句には、玉と琥珀という美しい宝石を配して潑溂とした生気を醸し、転句の「醉」と結句の「不知」と相呼応して作者の豪放な酔い振りをうかがわせる、いかにも李白らしい作品。李白壮年時代の傑作の一首です。

付五　度桑乾　　桑乾を度る　　賈島

客舎幷州已十霜　　幷州に客舎して已に十霜
歸心日夜憶咸陽　　帰心日夜咸陽を憶う
無端更渡桑乾水　　端無くも更に渡る桑乾の水
却望幷州是故鄉　　却って幷州を望めば是れ故郷

3 愁思

愁思　　許渾

琪樹西風枕簟秋　　琪樹の西風　枕簟の秋
楚雲湘水憶同遊　　楚雲　湘水　同遊を憶う
高歌一曲掩明鏡　　高歌　一曲　明鏡を掩う
昨日少年今白頭　　昨日の　少年　今は白頭

【通釈】

起句　色づいて玉のように美しい木々に西風がそよぎ、枕やたかむしろにも冷ややかな秋の気配が感じられるようになった。

承句　昔、楚雲の湧く洞庭湖や湘水の辺でいっしょに遊んだ人のことを思い浮かべる。

転句　それにつれ、思わず歌の一ふしが声高らかに口をついて出たのだがうたいつつふと鏡に写った自分の姿を見て、忽ち鏡を掩ってしまった。

結句　つい昨日までの紅顔の美少年、今ははや白頭の老人になってしまっているのだ。

【語釈】

◉秋思…秋のものさびしい思い。◉琪樹…玉のように美しい木。◉西風…秋風をいう。◉枕簟…まくらと「たかむしろ」寝具をいう。簟はたかむしろ、竹で編んだむしろ。◉楚雲湘水…楚は戦国時代の楚の地。今の湖北省、湖南省。洞庭湖がある。湘水は洞庭湖に注ぐ川の名、風光明媚で知られ、又多くの伝説がある。◉同遊…いっしょに遊ぶ。又いっしょに遊んだ人。◉高歌…声高らかにうたう。◉掩明鏡…鏡をおおうこと。明鏡は明らかな鏡。

【押韻】下平声十一尤韻　秋、遊、頭。

【解説】

許渾（七九一―八五四？）は晩唐の人。潤州丹陽（江蘇省）の生れ。初唐の宰相許圉師の子孫。（因に許圉師の孫娘の一人は李白の妻となった）大和六(八三二)年進士及第。大中三(八四九)年 監察御史となり、更に睦州（浙江）、郢州（湖北）の刺史を歴任の後、病を得て故郷潤州に隠棲して終った。晩年は仙人、隠者の世界にあこがれていたという。

この詩は作者が刺史（長官）として郢州に在った時の作とするのが一般的だが、むしろ晩年潤州に隠棲の後、昔 洞庭湖のほとりに友人と遊んだ時をしのんで作ったものとする方が自然のように思われる。又詩中の楚雲は巫山の神女（楚の懐王の伝説）湘水は湘妃（舜帝の妃、娥皇・女英の伝説）を連想させることから、同遊の相手は、その当時この地でねんごろにしていた美人であろうという見方もある。いずれにしても、秋風に対する老境の身の心情を、静かに詠じた佳作といえます。特に結句が利いています。

4 照鏡見白髪

鏡に照らして白髪を見みる　　張九齢

宿昔青雲志
蹉跎白髪年
誰知明鏡裏
形影自相憐

宿昔青雲の志
蹉跎たり白髪の年
誰か知らん明鏡の裏
形影自ら相憐まんとは

【通釈】

起句　昔若かった頃は、学問を修めて立身出世しようという大志をいだいていたものだ、
承句　しかしつまずいて、志を得ないうちに白髪の年になってしまった。
転句　だれが予想したであろう、鏡の中に、
結句　映った我が身の影とこうして憐れみ合うことになろうとは。

【語釈】

◉照鏡…鏡に映すこと。◉宿昔…むかし。
◉立身出世しようとする志。又学得を修めて聖賢の地位に至ろうとする志。
◉蹉跎…つまずく。時機を失う。失敗して時機を逸すること。
◉白髪年…頭髪が白くなる年。老年。
◉明鏡…みがいたよく映る鏡。◉裏…うち。なか。

【押韻】下平声一先韻　　年、憐。

【解説】

張九齢(六七八―七四〇)、は韶州（広東省）の人。若くして文才を現し、則天武后の長安二年(七〇二)進士及第。玄宗皇帝の信任を得て累進、中書令（宰相）に至った。しかし、李林甫に陥れられて失脚。荊州（江陵）に左遷され病没した。

この詩については、作者の詩集「曲江集」には「照鏡見白髪連句」として収められていることから張九齢と他の誰かとの合作であろうという考証があり、又宰相の地位にまで出世した本人の実感の詩とは考え難いという見方がある。一方、宰相の位に上りながら政敵の陰謀により失脚した時の作品という説もある。いずれにしても、老年なって、若き日の大志は果さず、鏡に向って自らの白髪を悲しむという人生の悲哀を詠じた傑作で、特に起句と承句の青雲と白髪の対比は秀逸です。

5 秋思

秋思　張籍

洛陽城裏見秋風
欲作家書意萬重
復恐匆匆説不尽
行人臨發又開封

洛陽 城裏 秋風を見る
家書を 作らんと欲して 意い万重
復恐る 匆匆にして 説いて尽さざることを
行人 発するに臨んで 又封を開く

【通釈】

起句　洛陽の町に秋風が吹きわたる季節になった。
承句　故郷の家族に手紙を書こうと思い立ったが、いざ書きはじめると、積もる思いが次々とおしよせる。
転句　あわただしく書きあげたが、言いもらしたことが無いかと心配になり、
結句　手紙を託す人が出発するに当り、又封を開いて読み返してみる。

【語釈】

◉秋思…秋の思い。
◉洛陽…唐代 都 長安と共に洛陽に東都を置いた。
◉城裏…町の中。
◉家書…家族に送る手紙、又家族からの手紙。この場合は前者。
◉匆々…あわただしいさま
◉行人…旅人、使者。

【押韻】上平声 一東韻　　風。二冬韻　　重、封。
このように似ている韻を共通して用いることを通韻という。

【解説】

張 籍（七六八―八三〇？）は中唐の詩人。江南蘇州（一説には烏江）の生まれ、貞元十五年（七九九）進士及第。秋風と郷愁の組み合せは古今変わらぬ詩の題材です。

この詩は作者が故郷を出て都 洛陽に上り、科挙の為の勉強中か、或いは役所勤めをした頃の作品と思われます。詩中 郷愁そのものを直接言わず、「秋風を見て」「家書を作らんと欲し」「又封を開く」という一連の動作によって、それを巧みに表現しています。時がゆるやかに流れていた、古きよき時代の美しい情景です。

6 京師得家書

京師にて家書を得たり　　袁凱

江水三千里　　江水三千里
家書十五行　　家書十五行
行行無別語　　行行別語無く
只道早歸鄉　　只道う早く郷に帰れと

【通釈】

起句　江水を三千里も隔てた国もとから、
承句　届いた妻からの手紙はわずかに十五行ほど、
転句　どの行も、どの行もほかのことは言わず、
結句　ただただ、早く家に帰って下さいというばかり。

【語釈】

◉京師…都。この場合は南京。
◉江水三千里…南京から作者の故郷松江までの距離。実際はそれ程離れてはいないが、三千は遠いことを強調する慣用法。
◉家書十五行…当時の便箋は八行が規格であったので、便箋二枚をいう。起句の三千里と対語として短さを強調している。
◉行行…どの行もどの行も。
◉別語…ほかの言葉。
◉道…言う

【押韻】下平声 七陽韻　　行、鄉。

【解説】

袁凱（生没年不詳）は明初の詩人。松江(江蘇）の人。号は海叟。明の初代皇帝太祖(洪武帝)に仕え御史となったが、帝の不興をかい、退職し故郷に帰った。この詩は役人として南京に滞在中に、故郷に残した妻からの手紙を得て作ったもの。起句と承句を対句でまとめ、一切修飾語を排した簡潔な表現のうちに遠く国もとに残した妻から便りを得た喜び、妻の思い、又その妻へのいとおしみを美事に表現した逸品です。

7 江樓書感

江樓にて感を書す　　趙嘏

独り江樓に上って思い渺然たり、
月光は水の如く水は天に連なる。
同じく来って月を翫びし人何れの処ぞ、
風景は依稀として去年に似たり。

獨上江樓思渺然
月光如水水連天
同來翫月人何處
風景依稀似去年

【通釈】

起句　ただ一人で、大江沿いの高殿に登って眺めれば、思いが果てしなくわき起って来る。

承句　月光は水のように澄みわたり、江水は遥かに天に連なって流れている。

転句　いっしょにこのたかどのに登り、月を眺めたあの人は今どこにいるのであろうか（もうこの世には居ないのだ）、

結句　風景は去年のあの時と変わらないまゝであるのに。

【語釈】

◉江楼…江（大きな川）のほとりのたかどの。◉渺然…はてしないさま、はるかに広いさま。◉如水…水のようである。多いことの形容、融合することの形容、融通無限の形容、流れ去って帰らない形容、あっさりしていることの形容等々に用いるがここでは澄みわたっている形容と解釈。◉同…共に、いっしょに。◉翫月…月を眺めて楽しむこと、弄月。◉依稀…①よく似ている②明らかでないさま。◉去年…前年、昨年。

【押韻】下平声一先韻　　然、天、年。

【解説】

趙嘏（八一五―？）は晩唐の詩人。会昌二年（八四二）の進士。

詩は独り江楼の上で、曽て相携えて月を賞した、今は亡き人をしのんだもので、平易で静かな表現の中に惻々たる悲しみの情をこめた名作です。特に起句の「獨上」に対し転句の「同來」を配した手法は美事です。

この詩には秘められた哀しい物語があります。趙嘏には若くして相愛の美しい女性がありました。科挙の試験に挑む為、上京するに当って、彼女は彼の母の家に留まり孝養をつくしていました。ところが盂蘭盆会の日、彼女が寺に参詣した折地方の長官に見染められ、そのまゝ連れ去られます。翌年、趙嘏は進士及第の後、これを知り悲嘆の詩を作りました。長官はこれを聞き彼女を長安の彼の元に送ります。趙嘏は喜んで出迎え横水駅という処で相遇いますが、彼女は痛哭し二晩の後死んでしまいます。この詩はその後、作者が曽遊の地を訪れた時の作とされています。

8 竹里館

竹里館　王維

獨坐幽篁裏　独り坐す幽篁の裏
彈琴復長嘯　弾琴復長嘯す
深林人不知　深林人知らず
明月來相照　明月来りて相照らす

【通釈】

起句　静かで深い竹やぶの奥（にある館）にひとり座って、
承句　琴をかなで、又声長く詩を吟じる。
転句　この深い林の中のこと、知る人はいないが、
結句　明月だけが訪れて、照らしてくれるのだ。

【語釈】

◉幽篁…静かな竹やぶ。奥ふかい竹やぶ。篁は竹やぶ。◉裏…うち、なか。◉弾琴…琴をひく、琴をかなでる。◉長嘯…声を長くのばして詩を吟じる。◉深林…深く茂った林。◉明月…あきらかな月、晴れた夜の月。◉相照…照らす。相互に照らすという意味ではない。

【押韻】去声 十八嘯韻 嘯、照。

【解説】

王維（六九九―七六一）は盛唐を代表する大詩人の一人。一歳年下の弟王縉と共に若くして俊才のほまれ高く、二十一歳で進士及第。詩風は典雅、静謐と評されている。詩の他に書、画にも秀で、又琵琶の名手でもあった。又家族思いで、兄弟仲がよく、熱心な仏教信者で、三十歳の頃妻を亡くした後、一生再婚しなかったという。官位は昇進と挫折を経験、特に安禄山の乱では一時賊軍に捕えられ、大きな挫折を味わった。四十歳を過ぎた頃、長安の南東の渓谷、輞川の地に広大な別荘地を手に入れ、余暇には親交の裴迪と共にここに籠り、詩を作り、琴を弾じ、仏教を論じて楽しんだ。別荘地内の多くの景勝地に夫々名称をつけ、それにちなんだ詩が輞川集と題して残されている。此の詩はその一つで、竹里館とは竹林の中の館の意で、そこでの自らの楽しむ様を詠じた絶唱です。

この詩は、古来日本人の心をとらえ、画や詩吟の題材となってきました。又夏目漱石は「草枕」の中でこの詩を引用し「只二十字のうちに優に別乾坤を建立している。・・」と評しています。此の詩に唱和した裴迪の詩を左に掲げます。

同詠　裴迪

來過竹里館　来たりて竹里館に過り
日與道相親　日に道と相親しむ
出入惟山鳥　出入するは惟だ山鳥のみ
幽深無世人　幽深世人無し

9 宿石邑山中

石邑山中に宿す　韓翃

浮雲不共此山齊　浮雲も此の山と斉しからず
山靄蒼蒼望轉迷　山靄蒼蒼として望転た迷う
曉月暫飛千樹裏　暁月暫く飛ぶ千樹の裏
秋河隔在數峰西　秋河は隔てて在り数峰の西

【通釈】

起句　浮き雲も此の山の峰々ほどの高さはなく、（峰の中腹に漂い）
承句　靄は青々と深く山を包み、辺りはぼんやりとして見定めがつかない。
転句　見あげると明け方の月が生い茂る木々の中を一瞬飛ぶように動き、
結句　天の川が峰々を隔てた西の空に懸かっている。

【語釈】

◉石邑…今の中国河北省西陘県の古名。太行山脈の険阻な山々が連なる地方。
◉共…ここでは與と同じ比較の助詞に用う。
◉齊…等しい。同じ。
◉蒼蒼…深い青さをたたえた形容。
◉轉…うたた。いよいよ。ますます。、
◉曉月…明け方の月。
◉秋河…秋の夜の天の川。

【押韻】上平声 八齊韻　　齊、迷、西。

【解説】

韓翃は中唐の詩人。南陽（河南省）の人。字は君平。天宝十三年（七五四）の進士。官途に就いた後、一時辞任して十年間浪人生活を送った。後、徳宗に認められ中書舎人に到った。詩人としては銭起らとともに大暦十才子の一人に数えられる。

この詩は恐らくは作者が石邑の山中の仏寺か道観（道教の寺）に宿泊して作ったものであろう。秋の山中払暁の清冽な観望を詠じた佳作で、転結の対句の冴えが美事です。

10 贈殷亮

殷亮に贈る　　戴叔倫

日日河邊見水流　　日日河辺に水流を見る、
傷春未已復悲秋　　春を傷んで未だ已まざるに復た秋を悲しむ
山中舊宅無人住　　山中の旧宅人の住む無く
來往風塵共白頭　　風塵に来往して共に白頭

【通釈】

起句　毎日のように川のほとりで水の流れを見ては、時の過ぎゆくのを思う。

承句　つい先き程、逝く春に心を傷めたかと思うと、はやまた、秋を悲しまなければならない。

転句　山深い故郷に残して来た旧宅には、もう住む人も無く、

結句　世間の俗事にまみれ、うろうろと奔走しているうちに、お互い白髪頭になってしまいましたねえ。

【語釈】

◉見水流…水の流れを見る。論語・子罕第九の「子、川の上に在りて曰わく、逝く者は斯くの如き夫、昼夜を舎かず」が念頭にある。

◉傷春…逝く春をおしんで心を傷める。

◉風塵…風とちり。人の世。俗世界。俗事。官途などをいう。

◉來往…行ったり来たり。

【押韻】下平声 十一尤韻　　流、秋、頭。

【解説】

戴叔倫（七三二―七八九）は中唐の詩人。潤州金壇（江蘇省）の人。蕭穎士に師事して学問にはげみ、門下随一とうたわれた。撫州（江西省）刺史（長官）、容管（広西省）経略使などを歴任、実績をあげた。政治的手腕に優れ、又人物温和、その詩には幽遠の趣きがあると称せられた。晩年官職を辞して道士になろうとしたが、程なくして没した。この詩はその晩年の作、おそらくは官途にあっての心を許した友人の殷亮なる人物に贈ったものであろう。千数百年の時を隔てた現在でも共感出来る感慨をしみじみと詠じた佳作と云えます。

11 秋夜寄丘二十二員外

秋夜丘二十二員外に寄す　　韋應物

懐君屬秋夜　君を懐うは秋夜に属し
散歩詠涼天　散歩して涼天に詠ず
山空松子落　山空しゅうして松子落つ
幽人應未眠　幽人応に未だ眠らざるべし

【通釈】

起句　たまたまちょうどこの秋の夜、あなたのことを思いつつ、
承句　そぞろ歩きをしながら、涼しくひろがる天に向って詩を口ずさんでいる。
転句　人気のない静かな山中では、時おりカサッと松かさの落ちる音がきこえるばかり
結句　ひっそりと、山中に隠棲しているあなたもきっと(松かさの落ちる音を聞きながら)
　まだ眠っていないことでしょう。

【語釈】　◉丘二十二員外…作者の友人丘丹のこと。二十二は排行で一族中の兄弟いとこを年齢順に並べ上から二十二番目を示す。員外は官名。丘丹は戸部員外郎となったが、早くに辞職し浙江省、臨平山に隠棲した。◉屬秋夜…ちょうど秋の夜である。屬は、ちょうど…であるたまたま…である。◉散歩…そぞろあるき、ぶらぶらあるき。◉山空…空山は、人けのないさびしい山。◉松子…松かさ。◉幽人…世を捨てて隠れて棲んでいる人。隠者。ここでは友人丘丹を指す。◉應…「まさに…べし」と読む。推量の意を表す。

【押韻】下平声一先韻　　天、眠、起句は拗体、二四同、四字目孤平。

【解説】

韋應物（七三七？―？）は中唐の人。若いころは任侠を好み、玄宗皇帝の護衛兵となった。安禄山の乱で失職してからは勉学に努め官途についた。官の最終は蘇州刺史(長官)で人望を集めた。引退後は蘇州に留り、韋蘇州と呼ばれた。人物は天性高潔で詩作に優れていた。詩風は王維、孟浩然の流れをくみ、柳宗元と併せて「王孟韋柳」と称せられる。特に山水の世界を詠じた清冽、閑寂の詩が多い。

この詩は、作者が蘇州刺史であった時、浙江の臨平山に隠棲していた友人の丘丹に寄せたもので、韋應物詩を代表する名作で、古来幽絶を歌う絶品と評されている。

この詩に対し丘丹が唱和した詩を左に掲げます。

和韋使君秋夜見寄　　韋使君の秋夜寄せらるるに和す　　丘丹

露滴梧葉鳴　　露滴りて梧葉鳴り
秋風桂花發　　秋風桂花発く
中有學仙侶　　中に仙を学ぶ侶有り
吹簫弄明月　　簫を吹いて明月を弄す

12 十五夜望月

十五夜月を望む　　王建

中庭地白樹棲鴉　　中庭地白うして樹に鴉棲み
冷露無聲濕桂花　　冷露声無く　桂花を湿おす
今夜月明人盡望　　今夜月明人　尽く望むも
不知秋思在誰家　　知らず　愁思　誰が家にか在る

【通釈】

起句　中庭の地面は月光を受けて白く輝き、庭の樹上では鳥がねぐらについている。
承句　ひややかな露が音も無く結び、木犀の花を濡らしている。
転句　こよい、さえわたったこの満月を人は皆眺めているのだろうけれど、
結句　（私と同じように）秋の夜のもの思いにふけているのはどこのどんな人であろうか。
（貴方はどうであろう。）

【語釈】

◉中庭…なかにわ。
◉冷露…ひややかな露。露は月光の雫によって結ばれるとされていた。
◉桂花…木犀の花。月世界にも生えているとされる。
◉愁思…秋のもの思い。

【押韻】下平声 六麻韻　　鴉、花、家。

【解説】

王建（七五五？―八三一？）、字は仲初。中唐の詩人。潁川（河南省）の人。大暦十年（七七五）進士及第。楽府体の詩にすぐれ、宮中の女性の心情をうたった宮詞一百首で有名。

この詩の詩題は、全唐詩では「十五夜望月寄杜郎中」となっている。従ってここでは、作者が八月十五夜の明月を愛でながら友人の杜某を懐かしむ詩として鑑賞する。皓皓とさえわたる月光を、地面に照りはえる白い光と、それに影を落とす庭木、更に香り高い木犀に結ぶ露によって、間接的に美しく詠じ、そのあたかも月世界のような静けさの中で、独り秋のもの思いにふけりつつ友を思うという、しみじみとした情景を余韻を残しつつ美事に吟じた名作です。

13 秋風引

秋風の引　劉　禹錫

何処秋風至　何処よりか秋風至たる、
蕭蕭送雁群　蕭蕭として雁群を送る。
朝來入庭樹　朝来庭樹に入るを、
孤客最先聞　孤客最も先んじて聞く。

【通釈】

起句　何処からか秋風が吹き、
承句　さびしい音を立てながら雁の群を送ってくる。
転句　今朝がた庭の木々の間に吹き入り、枝をざわつかせる音を、
結句　都を離れて孤独な日々を強いられている私の耳は、誰よりも早く聞きつけるのだ。

【語釈】

◉秋風行…秋風のうた。楽府題の詩題には歌の意で行、曲、吟、引などが用いられる。
◉蕭…ものさびしいさまや音の形容。
◉朝來…朝がた。來は助字。
◉孤客…ひとりぼっちの旅人。客は臨時に他郷に住んでいる人、又 他郷から来ている人をいう。

【押韻】上平声 十二文韻　　群、聞。

【解説】

劉 禹錫（七七二―八四二）は中山（河北省）の人。貞元九年（七九三）二十一歳の若さで柳宗元とともに進士及第。二人は生涯を通じ無二の親友となった。官途につき、将来を嘱望されたが、政変により挫折、度々辺地に左遷された。

この詩は、おそらくはその不遇時代の辺地での作と思われる。雁には、蘇武が匈奴に使し、擒えられ幽閉された時、雁の足に手紙を結び付けて都にとどけたという故事があり、承句には都を思う作者の気持が託されている。さびしい秋の気配を誰よりも早く聞きつけるというさらりとした表現により、胸裏に秘めた孤独感、寂寥感をかえって痛々しく表現することに成功している。劉 禹錫の傑作の一つです。

14 秋思

秋思　　劉禹錫

自古逢秋悲寂寥
我言秋日勝春朝
晴空一鶴排雲上
便引詩情到碧霄

古より秋に逢いて寂寥を悲しむ
我は言う秋日は春朝に勝ると
晴空一鶴雲を排して上り
便ち詩情を引いて碧霄に到る

【通釈】

起句　昔から人は秋になると寂しさをかこつが、
承句　私は、秋の日は春の朝にまさっていると言いたい。
転句　晴れた空に、一羽の鶴が雲をおしわけてのぼってゆき、
結句　たちまち人の詩情をかきたてながら、碧くすみわたる空のかなたに飛んでゆく、
　　この秋の趣きのすばらしさよ。）

【語釈】

◉秋思…秋の思い。普通は秋の寂しいもの思いの意を含むが、この詩では、単に秋についての思いの意。
◉寂寥…ものさびしい様。
◉便…すぐに。たちまち。
◉詩情…うたごころ。心に触れた思いを、詩に表したいと思う気持ち。
◉碧霄…あおぞら。碧空。霄は空。天。

【押韻】下平声 二蕭韻　　寥、朝、霄。

【解説】

劉禹錫（七七二―八四二）は中唐の詩人。貞元九年（七九三）の進士。柳宗元とは生涯の親友であり、晩年には白居易と親しく交った。この人の詩は、平成二十七年…九月、（秋風引）、平成二十八年五月（烏衣巷）を鑑賞している。此の詩は、秋を詠ずるに、先ず「秋はものさびしい」という詩人の通念を否定して、春よりもましと述べて読む人をはっとさせ、後半秋の情景をのべるという手法で、碧空にのぼる一羽の鶴に托し、絵を見るようなすがすがしい秋景を詠じて見せた秀作です。

15 村夜

霜草蒼蒼蟲切切
村南村北行人絶
獨出門前望野田
月明蕎麥花如雪

村夜　　白居易

霜草は蒼蒼 虫は切切
村南 村北 行人絶ゆ
独り門前に出て 野田を望めば
月明らかにして 蕎麦 花雪の如し

【通釈】

起句　霜枯れた草は生気なく青白く照らされ、虫の声がしきりに聞こえる、
承句　村の南にも村の北にも、道行く人影は無い。
転句　ひとり門前に出て、野中の田の方をながめると、
結句　さやかな月明かりのもと、一面の蕎麦の花が雪のように白い。

【語釈】◉霜草…霜に打たれて枯れた草。◉蒼蒼…この場合は青白い色。◉切切…虫の声が細く絶え絶えに続くさま。◉野田…野中の田。◉蕎麥…そば。白い花をつける。

【押韻】入声 仄韻　　切、絶、雪。

【解説】

白 居易は中唐を代表する詩人。この人の詩は本年六月にも鑑賞しました。作者は四十歳の時、母の死に逢った。それまで順風満帆に歩んで来た彼の高級官僚人生の最初の大きな悲しみであった。彼は直ちに官を辞し、故郷である下邽(陝西省)の田舎に帰り、三年間の喪に服した。この詩はその時の作で、月明りの下人影もない村里の一面雪のように白い蕎麦畑と鳴きすだく虫の音、その中に一人立つ作者の姿が目に見えるようです。それにより、作者の深い、孤独な悲しみを美事に表現することに成功した佳作です。なお、仄韻がより一層悲しみを増幅しています。同じく、白居易、服喪中の作を二詩左に掲げます。

暮立　　暮に立つ　　白居易

黄昏獨立佛堂前　　黄昏 独り立つ 仏堂の前
滿地槐花滿樹蟬　　地に満つる槐花 樹に満つる蟬
大抵四時心總苦　　大抵 四時 心総べて苦しけれど
就中腸斷是秋天　　就中 腸の断たれるは 是れ秋天

贈内　　内に贈る　　白居易

漠漠闇苔新雨地　　漠漠たる闇苔 新雨の地
微微涼露欲秋天　　微微たる涼露 秋ならんと欲する天
莫對月明思往時　　月明に対して往時を思う莫れ
損君顔色減君年　　君が顔色を損じ 君が年を減ぜん

16 龍門下作

龍門の下にて作る　白居易

龍門澗下濯塵纓　龍門澗下に塵纓を濯い、
擬作閒人過此生　閒人と作って此の生を過ごさんと擬す
筋力不將諸處用　筋力は將て諸処に用いず、
登山臨水詠詩行　山に登り水に臨み詩を詠じて行かん。

【通釈】

起句　龍門山の下の谷川の水で、塵に汚れた冠の紐を洗い、
承句　閑人となって、今後の生涯を過ごそうと思う。
転句　種々雑多なつまらない事に体力を用いないで、
結句　山に登ったり、水辺に遊んだり、自然の中に詩を詠じつつ、気ままに生を楽しもう。

【語釈】

◉龍門…龍門山をいう。河南省、洛陽の南十三km。伊河を挟んで西に龍門山(西山)、東に香山(東山)がある。石窟で有名。◉澗…谷川。◉塵纓…ちりのついた冠の紐。転じて俗世の官職。濯塵纓は、ここでは、激しい党争の中の官職から遠ざかる意。◉擬…・・・しようとする。◉閒人…閑人、ひまな人。◉筋力…体力。

【押韻】下平声 八庚韻　　纓、生、行。

【解説】

白居易（七七二―八四六）は中唐を代表する大詩人。この人の詩は、本欄でもすでに多数鑑賞している。文宗の太和三年(八二九)、いわゆる牛党と李党による激しい党争を嫌い、白居易は病と称して刑部侍郎という官職を去って洛陽の郊外の履道里に隠棲し、朝廷から太子賓客という閑職を与えられた。時に五十八歳。この年、自ら龍門山の香山寺に遊びこの詩を作った。以後彼はしばしば香山寺を訪れ僧と交り、自ら香山居士と称した。官は宰相をも望める高位にまでのぼり、同時に当代最高の文人としての名声を擅にし、寿は当時稀にみる七十五歳という長寿を全うし、自ら幸福な人生を詠じ続けつつ、清らかな晩節を全うした白楽天の晩年、禅門に近づいた当時の心境を知るに足る清らかな作品です。

17 初入香山院對月

初めて香山院に入って月に対す　　白居易

老住香山初到夜　　老いて香山に住せんとし初めて到る夜
秋逢白月正圓時　　秋白月の正に円なる時に逢う
從今便是家山月　　今従り便ち是れ家山の月
試問清光知不知　　試みに問う清光知るや知らずや

【通釈】

起句　年老いて、ここ香山寺に住むことにして初めてやって来た夜、
承句　ちょうど秋の季節、白くすみきった月が丸く輝く時にでくわした。
転句　今夜からは、この月はわが家の月だ。
結句　試みにたずねてみたいが、この清らかな月はそのことを知ってくれているのかどうか。

【語釈】

◉初…はじめて。したばかりの意。◉香山院…香山寺。洛陽の竜門にあった寺で、竜門寺とも呼ばれる。◉白月…白く輝く月。秋の月、又冬の月。◉家山…故郷。ここでは「わが家」の意。

【押韻】平声 四支韻　時、知、起句は踏み落とし。

【解説】

白居易（七七二－八四六）は中唐を代表する大詩人。この人の詩は、本欄でもすでに多数鑑賞している。太和三年（八二九）白居易は刑部侍郎という高職にあったが、中央の激しい政治闘争を嫌い病と称して職を去り、洛陽郊外の履道里に隠棲した。この時龍門の香山寺に遊んで作った「龍門下作」を、令和元年十一月本欄で鑑賞した。白居易はその後いっそう仏教に傾倒し、六十一歳の太和六年（八三二）に香山寺を修築してそこに移り住み、自ら香山居士と号して僧と深い交わりを結び七十五歳の死去の時までの晩年を送った。

この詩は香山寺に居を移した夜の思いを詠じたもの。塵にまみれた政争の世界を離れ、この清く輝く月をわが家の月とする生活が始まるのだという白居易晩年の一点のくもりも無い心情をそのまま詠じた清らかな作品です。

付六　聞樂天授江州司馬　　楽天の江州司馬を授けられしを聞く　　元稹

殘燈無焰影憧憧　　残灯焔無く影憧憧
此夕聞君謫九江　　此の夕べ君が九江に謫せられしを聞く
垂死病中驚坐起　　垂死の病中驚きて坐起すれば
暗風吹雨入寒窓　　暗風雨を吹いて寒窓に入る

18 九月十日

九月十日　菅原道眞

去年の今夜侍清涼
秋思の詩篇独り断腸。
恩賜の御衣今此に在り、
捧持して毎日余香を拝す。

去年今夜侍清涼
秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此
捧持毎日拜餘香

【通釈】

起句　去年の今夜、宮中の清涼殿で、
承句　秋思という御題で詩を作り、（天皇の御褒めをいただいたが）そのことを回想すると断腸の思いだ。
転句　詩の出来映えのご褒美に頂いた御衣は今ここにある。
結句　捧げ持って毎日御衣に焚きこめられた香りを懐かしく拝するのだ。

【語釈】

◉九月十日…この詩題は「重陽後一日」となっている本もある。九月九日は重陽の節句で菊花の宴、更にその翌日詩会が宮中で催されたもの。◉清涼…清涼殿のこと。宮中内裏宮殿の一。十世紀の村上天皇以後、天皇が日常生活をする御殿として用いられた。◉侍…はべる。目上の人のそば近くにかしこまって居ること。◉秋思…秋のものさびしいおもい。醍醐天皇の昌泰三年（九〇〇）九月十日清涼殿の詩会の勅題が「秋思」であった。◉斷腸…はらわたがちぎれるほどの思い。非常な悲しみのたとえ。◉恩賜御衣…詩の出来ばえの賞として、天皇より賜った衣。◉餘香…あとに残っているかおり。

【押韻】下平声 七陽韻　涼、腸、香。

【解説】

菅原道真（八四九―九一三）は平安時代前期の学者政治家。文章博士、大学頭の家柄に生れ、若年から学才をもってきこえ、詩文に長じた。漢詩は白居易の影響を受け、当代随一の漢詩人であった。政治家としても蔵人頭を経て、醍醐天皇の昌泰二年（八九九）右大臣にまで昇進した。しかし、藤原家の策謀により冤罪をきせられ、昌泰四年（九〇一）太宰権帥に左遷され配所で没した。この詩は流謫の地大宰府での作で、平易な用語の中にも、深い悲しみと天皇の恩顧への感謝と忠誠心のこもった美しい作品となっています。

19 九月十三夜陣中作

九月十三夜陣中の作　上杉謙信

霜満軍営秋氣清
数行過雁月三更
越山併得能州景
遮莫家郷憶遠征

霜は軍営に満ちて秋気清し
数行の過雁月三更
越山併せ得たり能州の景
遮莫家郷の遠征を憶うを

【通釈】

起句　霜は陣営を白く蔽い、秋の気は清くすがすがしい。

承句　空を渡る幾列もの雁の影を、真夜中の月がさえざえと照らしている。

転句　越後越中の山々に能登を併せ、我が領土として眺めるこの景色の何とすばらしいことよ。

結句　故郷では家族たちが、遠征の結果を案じているであろうが、これはそれとしておいて、今宵はこの月を楽しもう。

【語釈】

◉九月十三夜…陰暦九月十三日の夜。陰暦八月十五夜「中秋の名月」を愛でる風習は唐代に始まったとされるが、九月十三夜の月見の宴は、平安末期わが国の貴族の間で始まったとされる。◉軍営…陣営。軍隊の営所。◉三更…五更の第三の時刻。今の午前零時前後。更は夜間の時刻の称呼。一夜を五更に分ける。◉越山…越後（新潟）・越中（富山）の山々。◉能州…能登の国。◉遮莫…「さもあらばあれ」と読む。それならばそうしておこう。ままよ。どうでもよい。◉家郷…故郷。ここでは故郷の家族。◉遠征…遠く行く。遠国を征伐する。

【押韻】下平声 八庚韻　清、更、征。

【解説】

上杉謙信（一五三〇―一五七八）はわが国戦国時代の武将。越後守護代長尾為景の第三子。幼名虎千代、元服して景虎、出家して謙信と称した。長尾家を継ぎ越後の国を統一、のち上杉憲政から上杉氏を与えられ関東管領職となった。天正元年（一五七三）越中を平定、翌天正二年（一五七四）加賀に攻め込み、九月、七尾城をおとしいれた。この時たまたま十三夜で、月色明朗であったので、軍中に酒を置いて諸将士を集め、宴酣にして、この詩を作ったとされている。謙信の得意の姿が目に見えるようである。謙信は武勇にすぐれていたのみならず、信仰心あつく文芸に親しみ、多能多才の典型的戦国武将であった。この詩は日本人の漢詩の中で、頼山陽の「題不識庵撃機山図」と並び古来最も一般に親しまれて来た作品と言えるでしょう。

20 感懐

感懐（かんかい）　西郷隆盛（さいごうたかもり）

幾（いく）たびか辛酸（しんさん）を暦（へ）て　志（こころざしはじ）始めて堅（かた）し、
丈夫（じょうふ）は玉砕（ぎょくさい）するも甎全（せんぜん）を恥（は）ず。
我家（わがや）の遺法（いほう）人知（ひとし）るや否（いな）や、
児孫（じそん）の為（ため）に美田（びでん）を買（か）わず。

幾暦辛酸志始堅
丈夫玉砕恥甎全
我家遺法人知否
不爲兒孫買美田

【通釈】

起句　幾度もつらい目にあい、鍛えられてこそ人の志は堅固になるのだ。

承句　（昔から云われているように）大丈夫たるものは、たとえ玉となって（節操のために）砕けても瓦となっていたずらに身の安全をはかるような恥ずべきことはしない。

転句　我が家の子孫にのこしておくおきてを、人は知っているのだろうか。

結句　それは、子孫の為に美田を買い（財産を蓄え）のこすようなことはしないということである。

【語釈】

◉感懐…思い、感想。この詩題は、偶感、偶成としている本もある。

◉辛酸…からさとすっぱさ。転じて、つらく苦しいこと。艱難辛苦。

◉丈夫…一人前のしっかりした男子。才能のすぐれたりっぱな男子。

◉玉砕…玉となって砕ける。節義を守り、又功名を立てて死ぬことをいう。瓦全の反対。

◉甎全…瓦全。瓦となって安全に残る。徒らに身を全うすること。何等為すことなく生きながらえること。玉砕の反対。甎はしきかわらで、瓦と同じ意。この詩では平仄の関係で甎を用いたもの。

◉遺法…子孫にのこしておく法則。「遺事」としている本もある。

◉美田…地味の肥えたよい田畑。美田を買うとは、財産を蓄えること。

【押韻】下平声 一先韻　堅、全、田。

【解説】

西郷隆盛、号南洲は維新の三傑の一人。薩摩藩の下級武士の家に生れたが、藩主に重用され、長州と同盟して尊王倒幕運動を起こし、戊辰戦争には官軍の参謀として東征した。維新後明治政府の参議となったが、一部と合わず、明治六年下野、鹿児島に帰り私学校を建て子弟を教育した。明治十年、地方の士族や青年達に擁立されて西南戦争を起こしたが敗れ自刃、正に英雄の名にふさわしい波瀾の人生五十年の生涯を終えた。この詩は、西郷隆盛自身の生きざまについての自負に基いた人生観、信念をそのまま詠じたものと思われるが、或いは当時已に名利に走ろうとしていた新政府の高官達への苦言の意をこめたものかも知れない。今日の政治家にも是非吟唱してもらいたい名詩です。なお、承句の「玉碎恥甎全」の出典は、隋唐時代の書北斉書、元景安伝の「大丈夫寧可玉碎、不能瓦全（大丈夫は寧ろ玉碎すべきも瓦全する能わず）」に依るものです。

付七　醉餘口號　　醉余口号（すいよこうごう）　伊達政宗（だてまさむね）

馬上少年過　　馬上（ばじょう）少年過（しょうねんす）ぐ
世平白髪多　　世平（よたい）らかにして白髪（はくはつ）多（おお）し
殘軀天所赦　　残躯（ざんく）は天（てん）の赦（ゆる）す所（ところ）
不樂是如何　　楽（たの）しまずして是（こ）れ如何（いかん）

21 山行

山行　杜牧

遠上寒山石徑斜
白雲生處有人家
停車坐愛楓林晚
霜葉紅於二月花

遠く寒山に上れば石径斜めなり
白雲生ずる処人家有り
車を停どめて坐に愛す楓林の晩
霜葉は二月の花よりも紅なり

【通釈】

起句　遠くものさびしい山を登って行くと石ころ道が斜めに続いている。
承句　そのかなたの白雲が湧いているあたりに（隠者の棲いであろうか）ぽつんと人家が見える。
転句　車を止めさせて、うっとり夕暮れの楓の林の景色を愛でながめれば、
結句　霜にあたって紅葉した楓の葉は、二月（旧暦）、春の盛りの（桃の）花よりも紅くあでやかである。

【語釈】

◉山行…山を行く、山歩き、山遊び。
◉寒山…ものさびしい山。
◉石徑…石の多い小道。
◉坐…そぞろに、なんとはなしに、うっとりと。
◉楓林…楓樹の林、楓はマンサク科フウ属の落葉高木、中国黄河以南に生育し、秋紅葉が美しい。
◉霜葉…霜のために黄や赤に色づいた木の葉。
◉紅於…・・・よりも紅い。於は比較を表す助字。後世この句から紅於が楓 或いは紅葉の別称として用いられるようになった。

【押韻】下平声 六麻韻　斜、家、花。

【解説】

杜牧（八〇三―八五二）は晩唐期を代表する詩人。京兆（陝西省西安）の生れ。若くして酒と風流を愛し、風流才子と呼ばれ、多くの洒脱な詩を残した。この詩は、杜牧の残した数々の美しい絶句の代表的な佳作の一つです。

22 夜雨寄北

夜雨北に寄す　李商隠

君帰期を問うも未だ期有らず、
巴山の夜雨秋池に漲る。
何か当に共に西窓の燭を翦り、
却って巴山夜雨の時を話すべき

君問歸期未有期
巴山夜雨漲秋池
何當共翦西窓燭
却話巴山夜雨時

【通釈】

起句　あなたは手紙で、私の帰る日を尋ねてよこしたが、その時期はまだわかりません。

承句　ここ巴山のあたりでは、いま夜の雨が降りしきり秋の池にみなぎっています。

転句　いったい、いつになれば、あなたの部屋で一緒に灯心を切り乍ら、（夜のふけるまで語り合い）

結句　巴山に雨の降る、この寂しい今夜のことを、かえって楽しく話すことが出来るだろうか。

【語釈】

◉夜雨…夜の雨。◉寄…よせる。おくる。伝える。◉北…作者の居る巴国の北方に当る長安をさす。又北堂（主婦の居所、転じて主婦）の略でこの場合長安に居る妻を指すとも解される。◉歸期…かえる時期。◉巴山…四川省にある山の名。長安のある陝西省を隔て、その南は巴国。◉何當…いつになったら・・・だろうか。◉西窓…西の部屋の窓。又婦人の部屋をいう。◉翦燭…灯心の燃えかすを切って明るくする。◉却…あとに述べることの方向が、それまでの文脈から変ることを示す副詞。

【押韻】上平声 四支韻　　期、池、時。

【解説】

李 商隠(八一二?―八五八)は晩唐の詩人。開成二年(八三七)進士及第。詩風は繊細、優美、典故のある語を多用し、難解な作品が多い。又恋愛詩に独特の境地をひらき、多くの傑作を残している。

この詩は、蜀(四川省)に赴任中の作者が、長安に残している妻に送ったものとするのが一般的であるが、むしろ相手は秘めた恋人とする方が味い深いとする説にも説得力がある。詩中、特に難解な語は用いず、「巴山夜雨」の語を二度使い、詩題の「夜雨」と併せて、旅先の孤独の寂しさのうちに相手の女性を思う気持ちを美事に表現したもので、恋愛詩人李商隠の面目躍如たる代表作の一つと云えます。

23 楽遊原

楽遊原　李　商隱

向晩意不適
驅車登古原
夕陽無限好
只是近黄昏

晩に向んとして意適わず
車を駆って古原に登る
夕陽無限に好し
只だ是れ黄昏に近し

【通釈】

起句　夕暮れがせまる頃、何故か心が楽しまず、
承句　車を走らせて楽遊原の丘にのぼって来た。
転句　この丘から眺める夕日の何と美しいことか、
結句　だがしかし、この美しい輝きにも次第に夕闇がせまっているのだ。

【語釈】

◉楽遊原…長安の東南にある丘。漢の宣帝が廟宇を立て、楽遊苑と名づけて以来長安人士の行楽の地となった。丘からは長安の街が一望出来、又北方には多くの陵が見える。
◉向晩…日暮れに近づいてゆく。向はある状態に近づいてゆく意。
◉意不適…心が楽しくない。適はよろこぶ意。
◉古原…楽遊原のこと。古くからの行楽地。
◉只是…だがしかし。
◉黄昏…夕方。たそがれ。

【押韻】上平声 十三元韻　　原、昏。

【解説】

李 商隱(八一二―八五六)、字は義山。河内(河南省)の人。晩唐を代表する詩人。二十六歳の時進士及第したが官途は不遇であった。詩は温庭筠と並び称せられる。特に七言律詩に優れ、典故を多用したきらびやかな風格のある詩を作った。

この詩は、特に難解な語を用いず、又技巧を凝らさず直截的な表現で、詩人の心の奥底にある言い知れぬ不安感を詠じた、五言絶句の傑作である。この詩は又、今日平和の中にひたすら余生を楽しむ老人の心にもずしんと響くものを持つ一品です。

24 秋怨

秋怨　　魚玄機

自歎多情是足愁
況當風月滿庭秋
洞房偏與更聲近
夜夜燈前欲白頭

自ら歎ず多情は是れ足愁なるを、
況んや風月庭に満つる秋に当るをや。
洞房偏えに更声に近し、
夜々灯前に白頭ならんとす。

【通釈】

起句　自分でつくづく情なく思うのは、物事に感じやすく人を思う心が多いばかりに、いつも愁いを抱き悲しんでいることです。

承句　ましては、今は秋風が吹き、明月の光が庭一面に照りそそぐ季節。

転句　しかも私の寝室のすぐ近くから夜の時を告げる太鼓の音が（独り寝の私にあてつけるように）響いてきます。

結句　こうして私は毎夜毎夜、ともしびの前で、（空しく太鼓の音を聞きながら、）みどりの黒髪も白くなろうとしているのです。

【語釈】

◉秋怨…秋の夜の女性の悲しみ。
◉多情…ものごとに感じやすく、人を思う心が多いこと。
◉足愁…愁いが多いこと。◉風月…清風と明月。又男女の情事を寓意する。
◉洞房…女性の寝室。
◉偏…甚だしくある状態に偏っていること。「いやなことに」の意を含む。
◉更聲…夜の時を告げる太鼓の音。◉白頭…しらが頭。

【押韻】下平声 十一尤韻　愁、秋、頭。

【解説】

魚玄機（八四三―八六八）は晩唐の女流詩人。長安の遊里の生まれという。幼少の頃から読書を好み詩才があった。十七、八歳の時、当時補闕の地位にあった。李億の妾となったが、その愛が衰えると、道教の名刹咸宜観に入って女道士となった。以後、多くの名士と親交を結び、詩を応酬し多情な生活を送ったが、最後は恋人をめぐり、自分の侍女を笞で打ち殺したため捕えられて処刑された。時に二十六歳の若さであった。この詩は、自らの多才と多情の故に身を滅ぼした恋多き女流詩人がひそかに思いを寄せる人、あるいは去って行った人に贈ったものと見られる傑作の一つです。

25 畫睡鴨

畫睡鴨　黄　庭堅

山雞照影空自愛
孤鸞舞鏡不作雙
天下眞成長會合
兩鳧相倚睡秋江

山雞 影を照らして 空しく自愛し
孤鸞 鏡に舞いて 双を作さず
天下 真成 長く会合するは
両鳧 相倚りて 秋江に睡る

【通釈】

起句　山雞は、ただ自分の美しさを愛するばかりで死んでしまい、
承句　つれあいを失った鸞は、鏡に写った自分の姿を相手と思い舞ったが、つがいにはなれなかった。
転句　この世の中で本当に仲良く、いつまでも連れあっているのは、
結句　秋の川べりで、寄り合って睡っているつがいの鴨だけだ。

【語釈】

◉畫睡鴨…睡っている鴨を画いた絵。一書には単に睡鴨と又別の書には題畫睡鴨となっている。◉山雞…やまどり。起句は、晋の張華の撰した［博物志］に「山雞美毛有り、自らその色を愛し、終日水に映じ、目眩みて則ち溺死す」とあるのをふまえる。◉照影…かげ（姿）を映す。又映ったかげ。◉自愛…みずからその身を愛する。自分の利ばかりを計る。◉孤鸞…つれあいを失った鸞。鸞は鳳凰の一種。承句は、つがいを失った鸞が鏡を見て、自分の姿を慕って一夜中悲鳴して死んだという古語に基く。◉雙…つがい。◉天下…世の中。世界中。◉眞成…まことに。◉會合…会う。集り合う。連れ合う。◉兩鳧…二羽の鴨。

【押韻】上平声 三江韻　　雙、江。　起句、承句を対句とし、起句は踏み落とし。

【解説】

黄庭堅（一〇四五―一一〇五）は北宋、江西の人。字は魯直、山谷道人と号した。二十三歳で科挙に及第して官途についた。後、蘇軾門下に入り、蘇門四学士の一人となった。蘇軾の旧党に属したため、しばしば左遷のうき目に遇った。

この詩は、江辺に寄りそって睡る、一つがいの鴨の絵を見て詠じたもので、至福は平凡の中にこそある、という寓意をこめ、今日なお新鮮さを失わない美しい作品です。

26 已涼

已涼　韓偓

碧闌干外繡簾垂
猩色屏風畫折枝
八尺龍鬚方錦褥
已涼天氣未寒時

碧闌干外 繡簾垂れ
猩色の屏風 折枝を画く
八尺の竜鬚方錦の褥
已涼の天気 未寒の時

【通釈】

起句　青い欄干の外には美しい刺繍飾りの簾が垂れ下がり、
承句　紅色の屏風には一枝の花の絵。
転句　（屏風のかげには）八尺四角の竜のひげの敷きものに錦織りの褥。
結句　涼しく未だ寒くもない好時節のひととき。

【語釈】

●已涼…すでに涼しさの訪れた好時節。
●繡簾…刺繍で飾られた簾（すだれ）。
●猩色…濃い紅色。猩は猩猩（しょうじょう）（想像上の獣）
●折枝…手折った一枝の花。又それを画く画法。
●八尺…唐代の一尺は三一・一センチメートル。八尺は約二・五メートル。
●龍鬚…竜鬚で編んだ敷きもの。竜鬚は植物の名「りゅうのひげ」
●方錦…四角形の錦織り。
●褥…しとね。敷物。座る時や寝る時に下に敷く物。
●未寒時…まだ寒くない時節。

【押韻】上平声 四支韻　　垂、枝、時。

【解説】

韓偓（八四四―九二三）は晩唐の人。龍紀元年（八八九）進士及第。栄進して中書舎人・兵部侍郎となり昭宗の信任厚かったが、時の権力者朱全忠（後に帝位を簒奪した）に従わなかったために地方に貶された。後再び召されたが入朝せず、閩（福建省）の王審知を頼って赴きそこで没した。詩人として気概に富む詩を作る一方で艶冶詩に巧でそれを収めた「香奩集」を残した。

この詩は爽やかな秋の昼さがり、麗人の午睡の様を詠じたものとされる艶冶詩であるが、詩中に全く人物を登場させず艶（あで）やかな闌干・簾・屏風・褥等を詠ずることにより却ってそれを美しく連想させるという手法を用いた珍しい一品です。

27 社日

社日　王駕

鵝湖山下稲粱肥
豚柵鷄棲半掩扉
桑柘影斜秋壯散
家家扶得醉人歸

【通釈】

起句　鵝湖山のふもとの村々は稲も粱も豊かに実り、清らかですがすがしい。
承句　家々の豚小屋も雞小屋も戸は半分開いたまま。
転句　道ばたの桑の木に、夕日が斜めに落ちる頃、秋祭りの賑わいも散り散りになり、
結句　人々は家ごとに、酔った老人をかかえるようにして帰って行く。

【語釈】

●社日…土地の神を祭る日。むらまつり。春の社日を春社といい、五穀の豊穣を祈り、秋の社日を秋社といい、豊穣を報告し感謝する祭。
●鵝湖山…山の名。江西省、鉛山県。（鄱陽湖の東南にある）
●稲粱…いねとあわ。穀物をいう。粱はおおあわ。粟に似て大粒。
●豚柵…豚小屋のかこい。
●雞棲…雞小屋。
●桑柘…くわ。柘はやまぐわ。桑の一種。

【押韻】上平声 五微韻　　肥、微、歸。

【解説】

王駕（八五一―？）は晩唐の人。字は大用。大順元年（八九〇）の進士。礼部員外郎に任じられたが、官を棄てて隠遁した。この人の詩「雨晴」は平成三十一年三月、鑑賞した。今回の詩は、江南農村地方、豊年の秋の平和な光景を、さながら眼前に見るように美しく詠じた傑作です。このような光景はわが国でも、戦前までは普通に見られたもの。

但実際は、この詩の詠じられた当時、唐朝は末期の動乱中で、都の騒々しい政情に失望した作者の胸中はこの平和な農村風景を前にして一層複雑であったに違いありません。

28 秋日田園雑興

秋日田園雑興　范　成大

垂成穡事苦艱難　成るに 垂 として 穡事は 苦 だ艱難なり
忌雨嫌風更怯寒　雨を忌み 風を嫌い 更に寒きに怯ゆ
牋訴天公休掠剰　牋もて天公に 訴 う 掠 剰 を休めよ
半償私債半輸官　半ばは私債を 償 い半ばは官に輸す

【通釈】

起句　農事は、もうすぐ収穫という時にひどく苦労するものだ。
承句　雨が降らないかと恐れ風をきらい、そのうえ寒さにやられぬかとおびえねばならぬ。
転句　お天道さまにお願いします、どうか雨、風、寒さを降して収穫をかすめとるような事をおやめください。
結句　収穫の半分は一年間に積った借金の返済にあて、半分はおかみにさし出す供出米なのですから。

【語釈】

◉穡事…農事。穡は穀物を収穫する意。
◉垂…なんなんとす。もう少しで・・・になろうとしている。
◉牋訴…文書をもって上に訴えること。牋は文書。◉天公…天の神。
◉掠剰…農民から税として穀物を供出させる時、役人が升をごまかして余分にとりたてること。ここでは天が災害を降して穀物を減収させることを天が掠剰すると見立ているが、同時に役人の掠剰への恨みをも含んでいると見るべきであろう。
◉私債…個人的な借金。◉輸官…税としておかみに供出すること。輸はさし出す。
【押韻】上平声 十四寒韻　難、寒、官。

【解説】

范 成大（一一二六―一一九三）は南宋の有能な愛国政治家。四十九歳で宰相になり、北方の金に使し、金の皇帝の前に堂々と困難な交渉に当った。
晩年は郷里蘇州に隠退し、四季の農民の暮らしぶりを詠じた連作「四時田園雑興」六十首を作った。その中の一首「冬日田園雑興」は平成二十五年十一月この欄で鑑賞した。今回鑑賞するのは同じく四時田園雑興六十首の中の一首で、秋の収穫を迎える農民の思いを詠じたもの。民にとって秋 最も心配するのは天候のこと、そして無事収穫を終えると今度は借金のとり立てと、お上への供出米をかすめ取る役人への対応。それが済むとあとには何も残らず、又借金生活に入るという農民の暮らしぶりを愛情深く詠じた作品です。

29 十日菊

十日の菊　鄭谷

節去蜂愁蝶不知
暁庭還繞折殘枝
自縁今日人心別
未必秋香一夜衰

節去り蜂愁えて蝶知らず
暁庭に還繞る折残の枝
自ら今日人心の別なるに縁る
未だ必ずしも秋香は一夜にして衰えず

【通釈】

起句　重陽の節句が過ぎてしまったのを、蜂は愁えているかのように飛んでいるが蝶は気がつかないで、

承句　明け方の庭に折り損なわれた菊の枝を、なおも昨日と同じように飛びめぐっている。

転句　（菊の色香が昨日と変ってみえるのは）今日の人の心が変ってしまったからなのであって、

結句　花自身の秋の香りが一夜にして衰えてしまったわけではないのだ。

【語釈】

◉十日菊…十日之菊。九月九日重陽・菊の節句の翌日の菊。時を過ぎた喩え。これと似た六菖十菊（六日の菖蒲・十日の菊）の語もある。

◉還…また。◉繞…めぐる。行き巡る。

◉折殘…折りそこなわれる。（折られた後に残る意ではない）殘は動詞の後にそえて、すたれる・損なわれるの意を表す。

【押韻】上平声 四支韻　知、枝、衰。

【解説】

鄭谷（八四二？―九一〇？）唐、袁州宜春（江西省）の人。字は守愚。光啓三年（八八七）の進士。乾寧四年（八九七）都官郎中に至った。朱全忠の専横により終に滅亡に到る唐王朝末期を支えた政治家であり詩人。末唐の芳林十哲の一人に数えられる。この詩は重陽の節句が過ぎて、昨日あれほど賞翫されながら今日は全く顧みられなくなった菊に同情する詩として一般に鑑賞されているが、本人には別に重陽を詠じた左のような詩があり、いずれも菊花に託して衰微する唐王朝を哀惜した詩とみることも出来る味わい深い作品です。

重陽夜旅懐

強插黄花三兩枝
還圖一醉浸愁眉
半牀斜月醉醒後
惆悵多於未醉時

重陽の夜の旅の懐い　鄭谷

強いて黄花の三両枝を挿し
還一酔して愁眉を浸さんと図る
半牀の斜月に酔醒めて後
惆悵は未酔の時よりも多し

付八　九日　九日

江邊楓落菊花黄
少長登高一望郷
九日陶家雖載酒
三年楚客已霑裳

崔　國輔

江辺楓落ちて菊花黄なり
少長高きに登って一えに郷を望む
九日陶家酒を載すと雖も
三年楚客已に裳を霑す

参考〔陶淵明傳〕嘗九月九日無酒。出宅邊菊叢中坐、久之滿手把菊。忽値弘送酒至、即便就酌、醉而歸。

嘗て九月九日酒無し。出でて宅辺の菊叢の中に坐し、之を久しうして満手に菊を把る。忽ち弘の酒を送りて至るに値い、即ちに便ち就きて酌み、酔うて帰る。

付九　九日送別

蓟庭蕭瑟故人稀
何處登高且送歸
今日暫同芳菊酒
明朝應作斷蓬飛

九日送別　王　之渙

蓟庭蕭瑟として故人稀なり
何れの処にか高きに登りて且く帰るを送らん
今日暫く同にす芳菊の酒
明朝応に断蓬と作って飛ぶべし